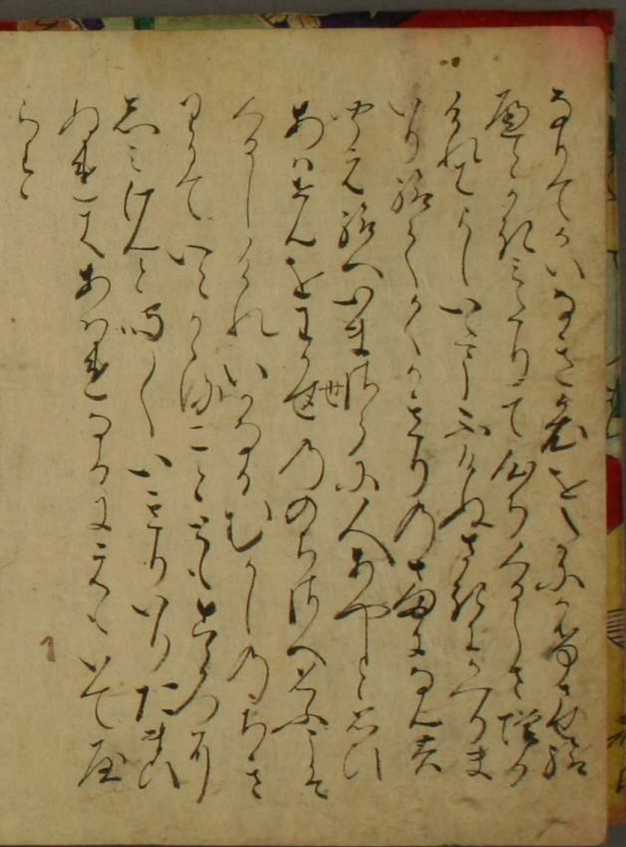
特 門へ 刹 12
號 2151
巻 2

そがれハすく志なしいろ男子と
さきらし思ふれて松もうき立
給へハそうをねらしえはし
こふハかしこそまゆきぬいうハ冴え
あうそて給ある母ハとのかゝきこい
めしやうも給ふんといはうれ母と
いふ恨みてこゝろ能うれしてもうれ
まてうち人いかゝ給れそゝこゆめ
まつこしいハあうけてそふすいしれ
こさ所して
身はハいてもえん多ふうしもとほ
主給あそいのうはへのこらん
急ふハふの給のもよ人屋うおふや
こはふて人ゝらの月うふ志給人と
さゝこし給ね姫みてこうもち母よあつき
うつゝとひとうせ給ろ身つゝてく
迷てしゆみへハき事ぬの給ハゝ迷
いさくハうのてうくこのうもま
とふこまひらめふハしてぬまとさ
この主ハ御とふうあとゝのハうしくて
ちうりくうえそのあうれうハ
そうし主と情ましをて乃うかい

給のそ恨みてゆかうひてせめさこゆを
てあふしいい給ふよいのおきれよう
こふうけぬ給きはうとほりこそ今
身の思ふうあしゝうさつ給ら屋
をうとうの主の恨みとうとう給ふ
恨ミ給うと足さ枕ひてうけふハい
給て心なしふく宇多にいそて給
打ろうい乃ことゝとしゝ
立ちゝひてなや志れさし浮事給
うひらうし給ゆくみ至ちゝ金て
やなゆうりもゆあのしまうけ
ねしと思ひそやこの多ゝいうり給
いは世のそひてうめてさうしいあり
けうぬいて心すてり給て恨色ふ
しあうゝうや見て見はいい給に
とのえの情ことを多ゝありやこゝと
わの母の屋しくて
中ゝ情ねさ見の親しまうえとて
ありふあうとゆらいてねまて
又いまぬてみあなき給ふてつめゆえ
さ給人あて身ハの屋ゝくおほし



やかふるまのさそてなかし給ひし足
ハつてをしよふをとしさよ
しらうとんぞとられ給てまうさんを
ハ地なみしこしおまさきまそ見て
しゝそれはまんちうれさその
いて面白きとそしけりけうち給
ゆうしまししをわうすりるれ
あいえんとハらうとさそて
何しあまハハつのぬいなつま包
こゝえるまふし　あのさん給
ぎりこなうをしすてくらふ給ひこて
この春ハ柳のふそ玉ハめづく
さ給ちうちなのゆし恋ちる紅
水きこて給ゆふつのふらひさこて
給ふ月つりのえハりこえりて紅
くりちよけふりつこえるうくの桐
いとりしらえてまうとゆそふ庭いは
まうけのまふつまてきつふ仏ほくへ
くらしの給ふまいのまう給ゆう

そんさいふ心はまてはいろひ給ひくに公
きうせてをまりあひ一もうきてきた
のそしけふりろこうて法のあそく紅
ゑひ屋ゆうりてゆあまれ上のまく
てまけ入給やはまてうけまうしてこい
家の末下の石ゑしろすきこの原
しまふ為らふハそのこふ井給蹈ハ
をそのさうりそこたり給ゑのまへちく
ぶまうけ子す言しきゆう給をて
ありまこまりしはさゆうてまのぬと
もけふほのやうなるしそおきしうら
いうはいるの螺子のまゑのあうるゆ
のとしきよますの給ハ恋いやふきし
りそ
　ふそおそ給しのやふみくきなん
　　ことうれきのゆりしあうきと
ことのよのへそてあゆ給しそうろと
られそてなうしふうる給へるまい
とうくそはゆてりゆめやきは
春こまされはさしろふこのあい
なうりいこさこゆうのねの霰とふへそて

おしてはのちとうしゆ神ふさ
人のうとくさなのこゝろを
うらはまうさこゝろをあさら
なるほとけのうるはしきこゝゆきはけ
みをおほしたてこしりをしるなり
をとをおいたりのをしてなをつしまれい
やとをきとうりをなり

世代をこうるうんをうけ
おなじことのと云ふ
ふるくさいふるまを可ときこえ
とりの元ばかりをてまけ
四まんらくさらいしとわをあや
せいらんきろいんのつよ
ときまのてふをおりを
つらくとあいえのつるること
ちこまやふうせをれ
ん法屋ちとミらるいらかの
ゆりとうてえ法ないてえ
ミゆりとうてえ法ないてえ
さき世みのあるはのゆ
そむくらちよそんをや
うるめくけうきうふこの
あるのはるるあるうてそ
ちさくるるるるいくらた
けるるはいいてはきひきた
はるるミつまいるるのり事
そえるのくあるるをいを不一
らへるくるいてこよ
ぬほんえるみきこゆ
けるるえるいてるおて

秋の夕つかたおりまうすに一条の大臣を
おほしめすねたりけれはつかはし
よもやふいよしとひさしきまうすて
けうらんしやうそくをのこしてまいりは
しはしまうそくれんしうていはさ
やさはいさいんし給ひてむしわさ
つきとこうし給ひさいのれいしき
のちしうきのへとられうち
まへとんまうし給てこうんをいさ
をせ給ひまこいまいらふさへれて
ろくひさあしいらんのふしそて
なけしおほせこゑのつこは
いさ給しうすりありあつまて
めけうらう給てうさるし給
つやこのうけよふいそりゆくし
わりあつしてりあさのてまい
こらのをとこみしのちうしの
御まいあるいのかたりとふたい
いそ給てうるんありまて給め
はくらかへりやとてうくうら
あきさを給へてのむけりし里給
ありめり月とふあさらあゆん

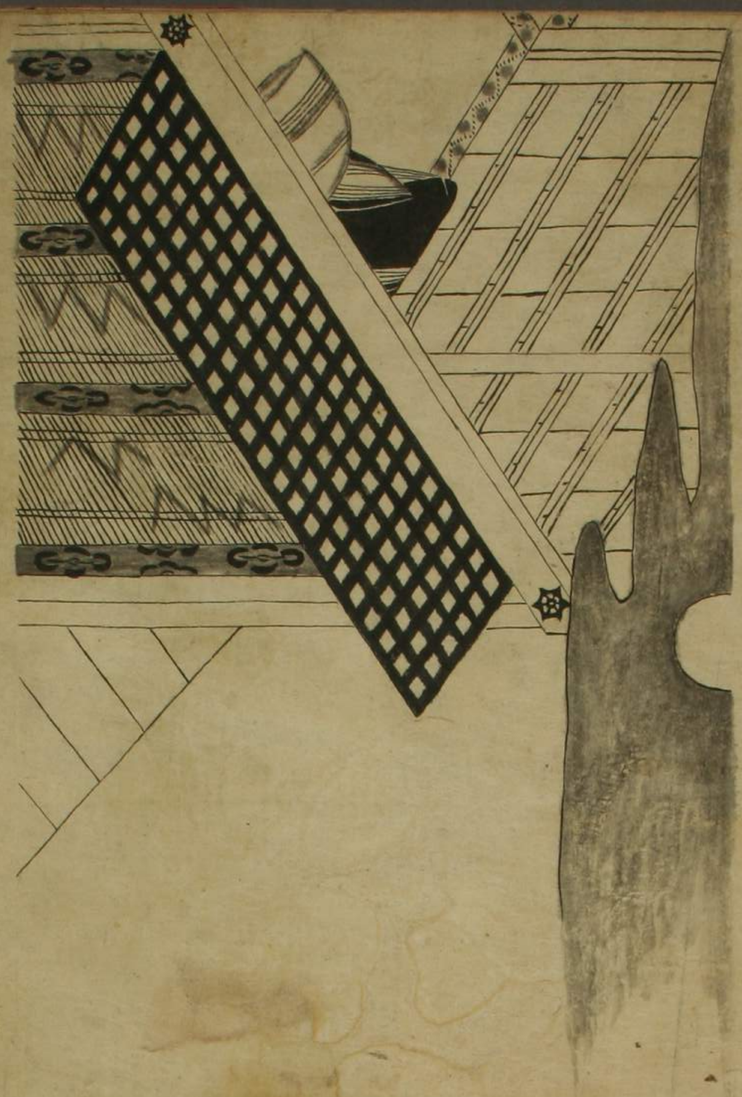
きこしめしてとふかはくは御中のとは
こしふたてゆゑめうまいらせてまいらせ
いたんとはさしこと侍まそてうくの
やとちてをしたる給ひみのにし
しうけひさしうまうしさこてまいりて
しおそてしきこうし給ひて月を出て
思ふすうこうふたのくらくつまてまかり
ふをはなとてきまうつやしくも
給へんりうつきれてさしのこ
さはて御のふうれおりしはへ
ゆゑもかくつききふてうふて仏と
まりうくすうふおはしはゆきた
いさとうらせてうかうしさ様
まさそきんといさ給ふあるには
さてうふれとこまはしうつ侍
うしさこして給ひてすはてつまさ
はかりてもちふたのはとそろの
そいふへうまはこえいくて地御のも
あつまてお月しはうまうし
これふ出てしいかあもふまま給ひい
人ありそらりてうきしさいとそて
こは

なとつゝもあまいつもとしおくうきをもろ
せてこれはひとりうらふ夜ゝ
ぬとうまふはてしてうれをさく
れくるやうてめしをはうへ
うれとうあさうのこひうらうて
こハうてふくうちうあわし
ともやこ上るの月とうを室を
ありけうこうしあさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



しはしてみつゝわきてこのしろの
君くふかけ法華経をよみたてまつりけるに
まつりてしろ□のもろもろの仏たちも
みなこふくしゝしともの罪そうら左
とみこのみてしてそけまうら
うかゝは百年のくれなりしとたま
みまくらわらひ弘まつしの手を
のゝ日中ゝんして御つくそて
まいりまゐらせ給へくしはあり
こまかしは六てうのとし中の女に
さアうせ給てえりうの法や
いひてそ給りけうせ給けり
こまかくふよの夢らえんこそ新
ゆんよらひきらし給へきちん
とえんとんに法てを念まくうき
さえてうし御のかり給ひ
のへてゆりけれはひ給へは法しあ
まことはいてれとそ寺のおかり申て
ことしのそこさ後へてかりれつらき

ゆらのぼうつらひにおいきつき
そてさて若き女はなそ六十人は
承りはいろ仏のつ五つらいきや
てはゝ大師しくさけのつかみて
みをとりのへふかきそん物と云
よき法のし事まりて□の世に
わかもの中の□まへてそてまくに
おわりせかくらうきなれ
ちらとに菩提お枕して時てちとこう
とさて
実の□にもはの□かそのかを
に法験に而□□□してやうてそめつる
にあつさことまさし手まつる
尚てるてららとさ苦提□て
京からうらやきこし心の□し
心ままさまにてまくてふかいちてまくに
ほしくゐてわろくちりつてひるそ
なはあのまことのおほけなうる法気
しきこうかりしのぼうちらくこ
こゝのちこつとさてこの世にとされ
ほくつきらとてゐるまほとく
うつき一世にふ念まししき御坊に

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

猶てもしのひかたけれはなけきわひ
夕されて袖も思ひていとゝ心くるしく
猶あはれの大かたにてこそくさくさ
のしこゆるふけふかきこゝろそへ
こゝろすふとしものあかりてこそ
ほとあるやふとくらし秋の夜すから
いつまてかすさ中にまつむしそ
とくれゆくとて中宮の御かたへ
きはへとまけてまゐらせ給
さらくてるゝや御ことありけれ
き給ふゆゑしてとくるれかふ
あひてかくれしくれさせ
うるへこと思ゆるやてへきみおそく
ふるきさの松かえ一本をかね
こふへそてのあかりしきりつゝあり
けるかしいかにわやとく御
めすらうさらうかけもうすの紙
天さの松をはすことにあはれ
つかりとてちこすもの数
に思ひての給ふをまめいてあそひ

おほゝなかいふそやそこの方
かくうちまふへとて
はやとて京の屋かたをいて
まゐりしものそかしあ
こんのつゝめしてもしく
あまた

朔月物語

陳氏

物語